

書と詩12―書（画、舞踊など）・歌謡・詩・言葉・音・こころ―

画家、詩人や作家の書



まさおかしき

正岡子規 1867年（慶応3）〜1902年（明治35）俳人・歌人・ジャーナリスト

名は常規 つねのり 幼名は升 のぼる 号は子規・獺祭書屋主人・竹の里人・香雲など54以上あるという。

松山藩の下級武士正岡常尚の次男として愛媛県松山市花園町に生まれる。

母八重は、藩校明教館の教授大原観山の長女。

1870年（明治3）3歳 妹律生まれる。（明治4）散髪脱刀令・廃藩置県

1872年（明治5）5歳 父が死去（39歳） 家督を相続。母と祖父観山に育てられる。

叔父（父の兄の政房）のもとに手習いに通う。

1873年（明治6）6歳 末広小学校入学

1875年（明治8）8歳 祖父観山死去（57歳）（明治10）西南戦争

小学校上級頃より武知五友の書を手本に学ぶ。

1880年（明治13）13歳 3月 旧制松山中学に入学 自由民権運動さかん

1883年（明治16）16歳 中学を中退し、叔父加藤拓川を頼って上京 共立学校に入学。陸羯南に会う

1884年（明治17）17歳 9月 東大予備門に入学（夏目漱石・南方熊楠・山田美妙らと同窓）

『筆まかせ』を起稿する。鹿鳴館時代

『筆まかせ』に「習字」を書く。短歌を始めた。

7月、俳句を大原其戎（旧派）に学ぶ。

8月、俳誌「真砂のしらべ」に初めて俳句が載る。

7月第一高等学校予科卒業 9月第一高等学校本科に進級 8月 鎌倉で初めて咯血。ベースボールと寄席に熱中する 「七草集」執筆

2月、新聞『日本』創刊。5月、大咯血 初めて「子規」と号す 肺結核と診断される漱石と交友がはじまる。夏、碧梧桐にベースボールを教える、翌年虚子にも

教えた。以後碧梧桐と虚子に俳句を教える 「大日本帝国憲法」発布

7月、第一高等学校本科卒業 9月、帝国大学哲学科に入学 「教育勅語」発布

2月、国文科へ転科。小説「月の都」執筆 写生に開眼。

秋頃、「俳句分類」を始める

11月、母と妹を呼び寄せ、上根岸八十八番地に住む 12月、日本新聞社の記者となる 新聞「日本」に「獺祭書屋俳話」を連載 俳句の革新運動を開始

2月、「日本」に俳句欄を新設 3月、帝国大学文科大学を退学 11月「日本」紙上に「芭蕉雑談」を発表。武知五友死去

2月、上根岸八十二番地に転居 「小日本」創刊、子規が編集責任者となる 中村不折と出会う 碧梧桐と虚子が二高を退学して上京 夏、日清戦争勃発

4月、従軍記者として遼東半島に渡るが、2日後に下関条約調印される 5月、帰国の途上、船中で咯血、神戸病院に入院 7月、須磨保養院で療養後松山に帰郷 松山中学に赴任していた親友漱石の下宿（愚陀仏庵）で静養 10月、再上京 「子規」

を排号とした 腰痛歩行困難

1月、子規庵で句会 脊椎カリエスと診断、手術をうける

臀部や背中に穴、膿が流れ出る。床に伏す日が多くなる。

1月、『ホトトギス』創刊 4月、「俳人蕪村」を連載する。

12月、子規庵で第一回蕪村忌開催

3月、子規庵で歌会 2月、蕪村句集輪講会をはじめめる

発表 10月、高浜虚子が「ほととぎす」を引き継ぐ

夏ころより座るのも困難になり、寝たきりで寝返りも打てないほどの苦痛を薬でだ

まして、俳句・短歌・随筆を書きつづけ、病床から後進の指導をし続けた 文章会

をひらいて写生文を実践指導する 秋、はじめての水彩画「秋海棠」を描く

8月、大量咯血。「叙事文」を「日本」に発表、写生文を提唱、文章会（山会）を

はじめる 4月、万葉集輪講会をはじめめる 子規庵歌会に伊藤左千夫・長塚節らが

参加

「日本」に『墨汁一滴』を連載 9月2日、日記『仰臥漫録』を書き始める

『病牀六尺』を「日本」に連載、死の二日前まで書きつづける 「菓物帖」「草花帖」

「玩具帖」に水彩画を描く 9月18日、「絶筆三句」、翌19日、永眠 満34歳



明治30年 子規庵にて



明治16年11月 子規16歳



明治7年 子規7歳

子規と詩書画（山上次郎著『子規の書画』などを参考にまとめてみよう）

子規は、初め、父に手習い（習字）を教わったらしい。その父は、子規が5歳の年、他界した。父の兄の政房は、松山藩の祐筆であつた。この叔父に手習い（お家流）を教わる。6歳から外祖父の大原観山の私塾で講義を聞き、習字も教わった。子規8歳の年、祖父は他界した。観山は大変な西洋嫌い、断髪令を無視して生涯丁髷を断たなかったという。子規はそんな観山を大変敬愛していた。祖父もまた子規をととても可愛がったという。

軸かけて椿活けたる忌日哉（明治32年、観山の25回忌に子規が詠んだ句）

父や叔父や祖父に可愛がられたのは、幼い子規がたいへん聡明で、字を書くのが好きで、巧みであつたからだと想われる。

小学校でも、子規は習字が優れていたらしい。当時の小学校では、毎日一時間、習字の授業があつたようだ。

小学校の上級になつて武知五友の書を手本

として習字に励んだ。武知五友は、祖父の親

友で、明教館で朱子学を教えた、漢学者で詩

文・歌・書画に優れていた。維新後は、流行

や洋風を嫌い、私塾を開き、閑に暮らした。

書は、日下伯巖に学んだ。趙子昂に傾倒した

伯巖の書風は松山の書家に大きな影響を与え

た。武知五友・大原観山・河東静溪（碧梧桐

の父）は、伯巖の門人。

五友は、子規の才能を愛し、子規の雅号「香雲」の額を書いて与えた。子規は

それを勉強室に掛けて勉学に励んだ。その扁額は、松山市末広町の正宗寺の子規

堂の「子規の勉強部屋」に残っている。子規は毎日放課後、山之内伝蔵の習字塾

でも学んだらしい。

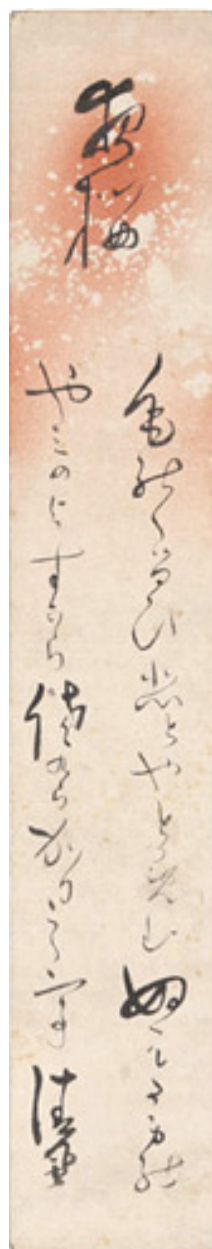


武知五友書「香雲」扁額

松山市正宗寺子規堂内

極楽や君が行く頃梅の花（五友の死を悲しんで子規の詠んだ追悼の句）

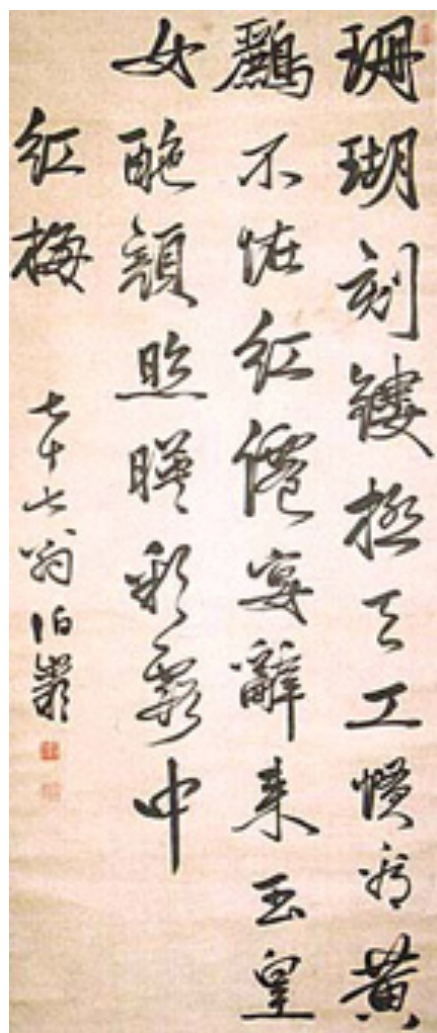
子規の書には、幼少時から学んだ、趙子昂↓伯巖↓観山・静溪・五友↓子規というように、継承された師匠たちの書風が現れている。



五友書「夜桜」短冊

夜桜

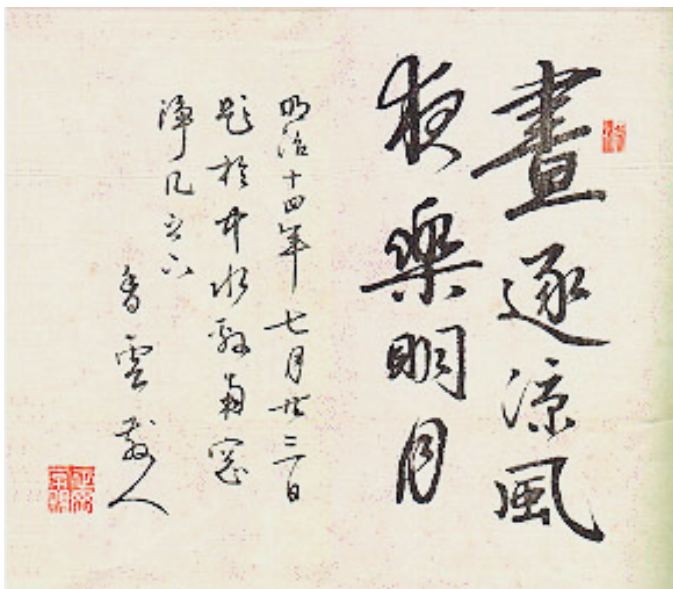
ものくるひ ひとやかめむ ぬはたまの
やみのよすからさくらかりして 清風



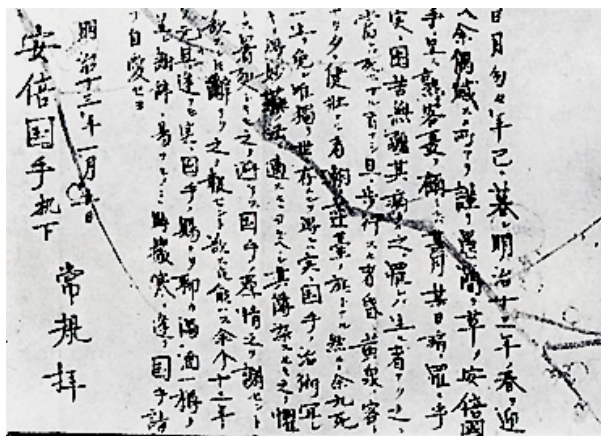
日下伯巖書「行草書七言絶句」133×56 cm

日下伯巖（1785～1866）

愛媛県松山市出身 朱子学者
松山藩の藩校の明教官教授
名は梁 字は伯巖 号は陶溪



子規書「帖」明治14年（1881）7月23日 子規14歳 13.5×8cm
「昼は涼風を逐い、夜は明月を楽しむ。明治14年七月廿三日 題梧中水 南窓浄几之下 香雲散人」



子規書「安倍国手宛書簡」明治13年1月5日 子規13歳
現存最古の手紙と思われる。美しい詩箋に書かれている。
「国手」は医者への敬称。これは安倍医師への礼状。



子規書画「近世雅感詩文」の挿絵（寒菊）
明治14年（1881）子規14歳 20.7×14.0cm
国立国会図書館蔵

子規中学生時代の書画。「近世雅感詩文」は漢詩文を編集した回覧雑誌。菊の墨絵と晩香寒翠 香雲の書

「他人の書法に模擬せんとすれば始めは必ず拙き字を書くべし、是れ其形を見て其神を見ざるが為なり」

（『筆まかせ』「習字」より）



子規模写「北斎・画道独稽古」部分 人物描写法
明治11年（1878）子規11歳 16.5×23.8cm
松山市立子規記念博物館蔵

子規の現存最古の筆跡

子規は、幼少の頃から絵が好きであった。絵を習い画家になりたいと母にせがんだが、許されず、画家になることを諦めた。しかし、絵は生涯描きつづけた。小学生時代の子規は、友人から葛飾北斎の絵手本などを借りて熱心に模写して絵を学んだ。また漢学者の祖父や祖父の友人たちに育てられた子規は、中国の南宗画を最高のものとする絵画観を持っていた。中学時代や大学時代に描かれた水墨画が残っている。

『筆まかせ』は、子規の随筆集。

東大時代の明治17年から25年までのことが書かれている。全4編。その中に「習字」と題する文があり、18歳にして、すでに、書の本質について悟っているようである。

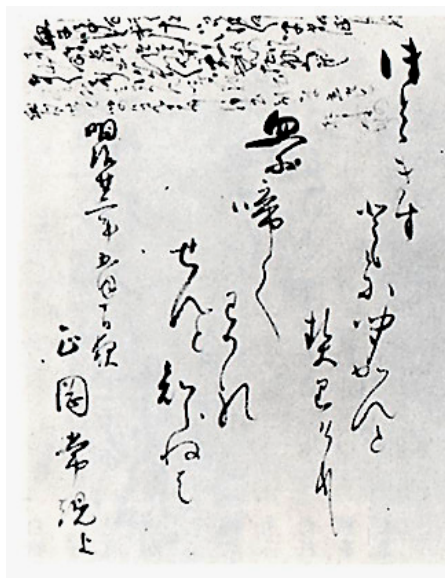
ベースボールは明治5年（1872年）頃、開成学校（東大の前身）の教師、H・ウイルソンによって伝えられたらしい。松山にベースボールを伝えたのは子規といわれる。

子規が最も熱中したのは、明治21～22年で、名キヤッチャーだったらしい。「打者」「走者」「四球」「直球」「飛球」などの訳語は子規の発明という。

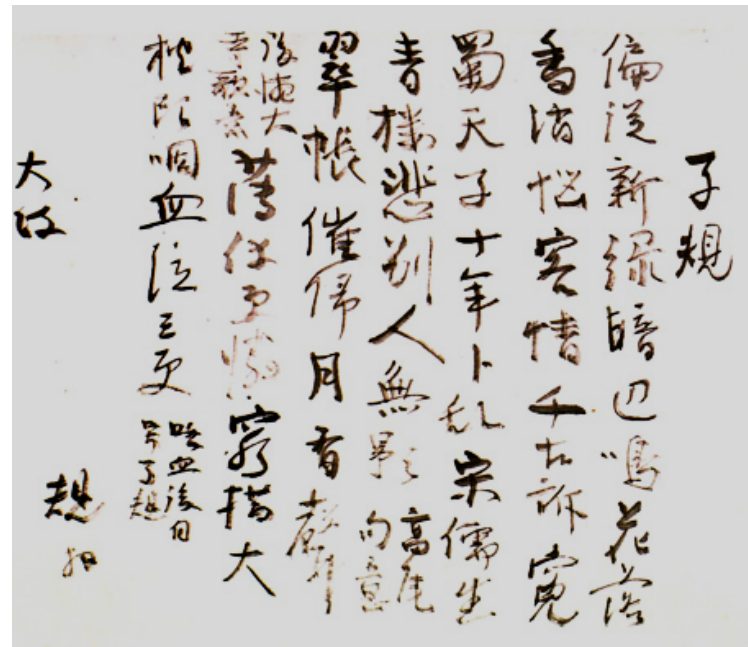
中学生だった碧梧桐や虚子にベースボールを教えたことがきっかけで、彼らは、子規から俳句を習うことになったらしい。



ユニホーム姿の子規（23歳）
明治23年3月、撮影
結核とは思えない姿である。



はととぎす
ともに聞かんと
契りけり
血に啼く
わかれ
せんと知らねば
明治22年5月10日夜
正岡常規上



子規書・漢詩「子規」明治22年（1889）子規22歳 大咯血の翌日に書かれた。

子規
偏従新緑暗辺鳴
花落香消惱客情
千古訴冤蜀天子
十年卜乱宋儒生
青楼悲别人无影高尾句
意 翠帳催归月有声後
德大寺歌意 薄倖更憐
窮措大 枕頭咽血泣
三更咯血後自号子規
大政 規拜
大咯血の後とは思えないほど冷静に、一字一字、ゆつくりと、自然に書かれている。子規の書風としては、あまり例がないものである。

子規は、明治22年の大^{だいかっけつ}咯血のあと、肺結核と診断された。彼は、余命をあと10年と考え、「子規」と号し、死に抗うかのように、猛烈に活動をはじめた。常盤会寄宿舎に「もみぢ会」を作つて句作に熱中し、明治24年からは「俳句分類」に着手し、それは後に『俳家全集』としてまとめられた。小説も書いたりしたが、小説での表現は諦めたようである。

明治22年の大咯血の翌日、上の図版の漢詩「子規」と、歌とを詠んだといわれる。

常盤会寄宿舎初代監督だった叔父の服部嘉陳が、監督を辞任して、松山へ帰ることになった時、子規は、この惜別の歌を詠み贈った。

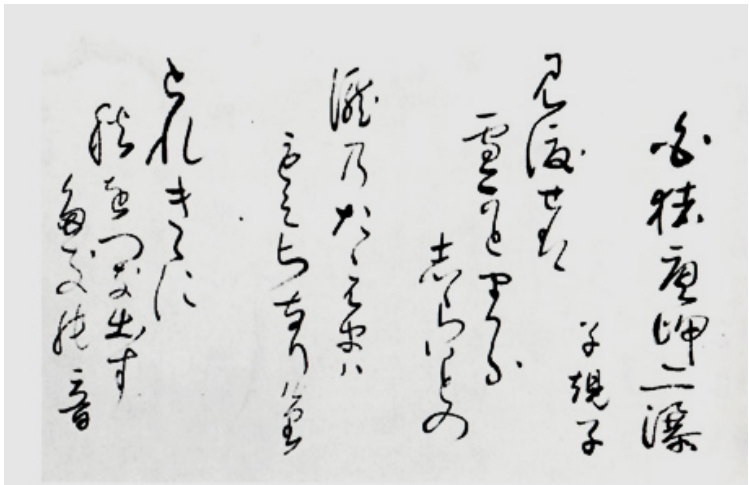
この学生時代に、夏目漱石や高浜虚子・河東碧梧桐らとの交友が始まった。



ホトトギス
子規とは、ホトトギスの異称。他に杜鵑、杜宇、蜀魂、不如帰、時鳥、などと表記する。

ホトトギスは、赤い口を開けて啼く様子が咯血している結核患者に似ているところから、「啼いて血を吐くホトトギス」といわれ、結核患者の代名詞であった。

卯の花をめぐってきたか時鳥 子規
卯の花の散るまで鳴るか子規 子規



子規書「近藤本家の書画帳の書」明治24年（1891）子規24歳

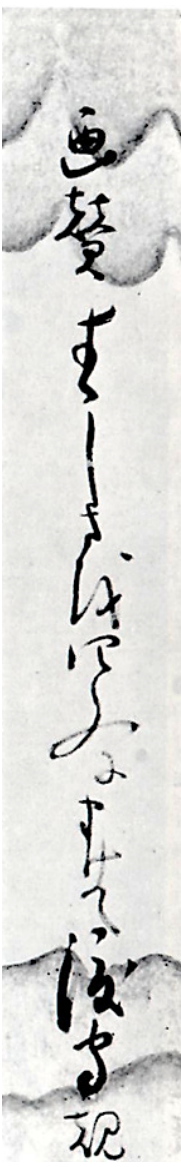
白猪・唐岬二瀑
子規子
見渡せば
雲かとまがふ
しらいとの
瀧のたえまは
もみちなりけり
たれきくに
秋をつき出す
たきの音

子規は、明治24年8月、帰省の折、白猪・唐岬の瀧を見物に行き、同地の素封家の近藤本家に二泊した。上の図版は、その時、部屋の床の間に置いてあった書画帳に歌と句を書いたもの。形式的で平凡な整った書風である。

4年余り後の明治28年12月、偶然、瀧を見物に来て、近藤本家に宿泊した漱石が、この書画帳を見て子規に宛てた手紙が残っている。

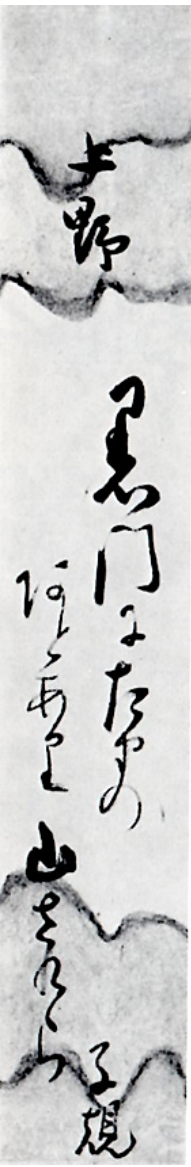
「近藤家にて観瀑の書画帳一覽中に、貴兄の発句及び歌あり、発句も書も頗る拙の様に思はれ候。僕此の書画帳を見て貴兄の処に至りて不覚破顔微笑す。（以下略）」（夏目漱石の手紙より）

この時、漱石は、俳句50句を作り、子規に添削を求めた。子規は、ほぼすべてに朱をいれ、「初心、平凡、いやみ」「まづい」「非俳句」「巧ならんとして拙なり」「陳也拙也」などと批評している。



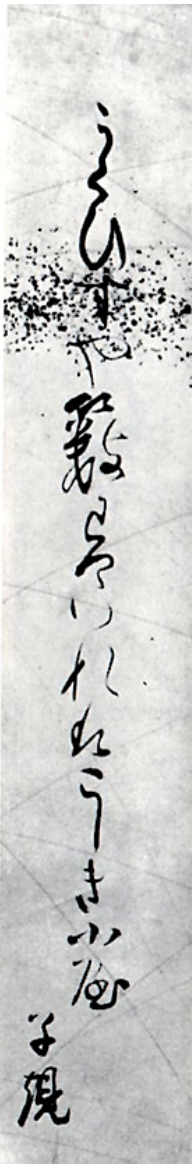
画賛 すすしさを四文にまけて渡守 規

子規書・短冊
明治25年（25歳）
子規最初期の短冊



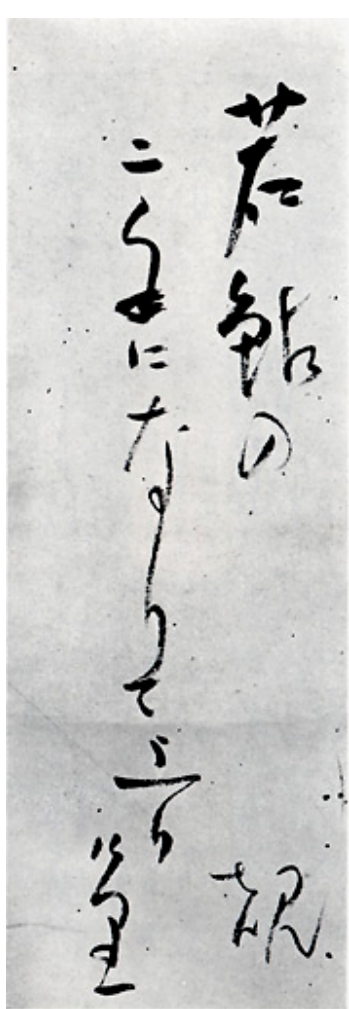
上野 黒門にたまのあとあり山さくら 子規

子規書・短冊
明治25年（25歳）
子規最初期の短冊



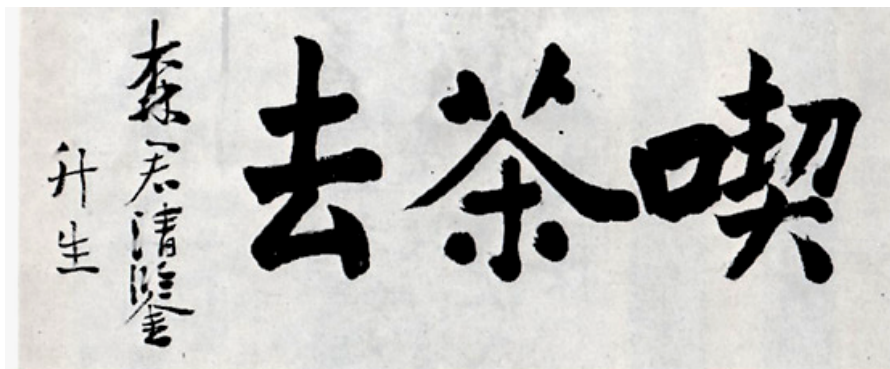
うくいすや藪わけいれはこしき小屋 子規

子規書・短冊
明治25年（25歳）



子規書・幅
明治25年（25歳）
48.5×16 cm

若鮎の二手になりて上りけり 規



子規書「喫茶去・森君清鑒 升生」扁額 32.5×76 cm 明治28年（1895年）子規28歳



陸羯南



明治27年3月 27歳
記者時代の子規



明治24年 24歳
旅姿の子規（房総の旅）



夏目漱石 25歳
明治25年12月撮影

夏目漱石との交遊

子規と漱石とは同年の生まれ。明治17年9月、同時に東大予備門に入学。しかし、交遊は、明治22年1月に始まる。

ふたりの出会いは、子規の作った文芸同人誌『七草集』^{ななくさしゅう}を読み、感動した漱石が「情優にして辞寡、清秀超脱神韻をもつて勝る」との批評を書いたことがきっかけだった。この時、はじめて漱石は「漱石」と号した。子規が「子規」と号した15日後の5月25日であった。漱石は寄席の話がきっかけで交遊が始まったと言っているが、それが本当のところかもしれない。漱石が、大咯血した子規に丁寧な手紙を送ったことから親友になったともいわれる。

漱石の『木屑録』^{ぼくせつろく}は、『七草集』^{ななくさしゅう}に触発されて書かれた漢詩漢文の紀行文である。それを読んだ子規は、漱石の英語、漢詩漢文の凄さに圧倒され、「余は初めて一益友を得たり」「吾兄の如きは千万人に一人のみ」「談心の友」「畏友」と記している。

子規は、明治25年の暮れ日本新聞社に入社した。その少し前に、松山から母と妹を呼び寄せ、上根岸に同居した。社長の陸羯南は書にも優れ、子規は大きな影響を受け、彼の書は明治26、27年に一変している。子規は、明治26年春、東大を退学し、新聞記者、または文筆家として生きる道を選んだ。

新聞「日本」に発表した「癡祭書屋俳話」^{だうさいしょくくわいわ}を皮切りに俳句革新運動ははじめられ、明治28年の「俳諧大要」によつて完成する。明治29年、子規の唱えた新俳句は「日本派」と呼ばれ文壇から認知された。

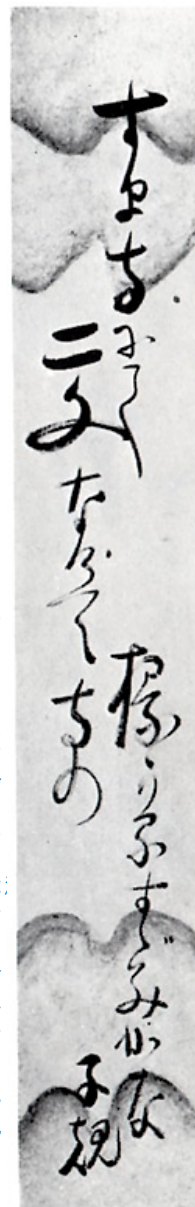
子規は、従軍記者として、明治28年4月、大連へ向かったが、上陸した二日後に講和条約が調印され戦争は終わった。子規は一月ほどの滞在で帰国することになったが、帰国の船中で大咯血し、神戸病院に入院、7月23日に退院し、須磨保養院に移った。一ヶ月の療養後、8月25日、松山へ帰り、叔父の所に滞在後、漱石の下宿へ移った。

偶然、漱石は、明治28年4月、松山中学へ英語教師として赴任し、下宿を「愚陀仏は主人の名なり冬籠」と吟じて「愚陀仏庵」^{ぐだぶつあん}と命名していた。そこへ、「桔梗活けてしばらく仮の書齋哉」と子規が転がり込んだのであつた。55日ほどの同居で二人は本当の親友になったと思われる。この間、子規は、友人たちと「松風会」を結成した。また、漱石の筆や墨を遠慮なく使って、短冊や条幅など多くの書の名作を創造した。二人は競うように書き句作したという。ここで子規は漱石の書の影響を受けた。

漱石は二階へ、子規は一階に住み、毎晩、子規の友人たちと句会を開いた。10月19日、子規は上京した。「行く我にとどまる汝に秋二つ」^{なれ}子規 帰京の途中奈良に寄つて「柿食えば鐘が鳴るなり法隆寺」を吟じた。

漱石は明治29年、松山を去り、熊本市の第五高等学校（後の熊本大学）の英語教師に赴任し、明治33年5月、英国に留学。子規の最期を看取ることは出来なかった。

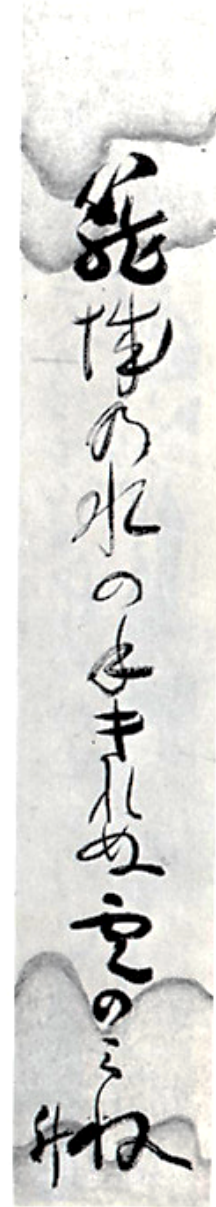
「手向くべき線香もなくて暮の秋」^{（高浜虚子宛 明治35年12月1日）} 漱石



すま寺にて 二文なげて寺の椽かるすずみかな 子規

子規書・短冊
明治28年

書道もろもろ塾('15, 7, 19)



籠城の水の手きれぬ雲のみね 升

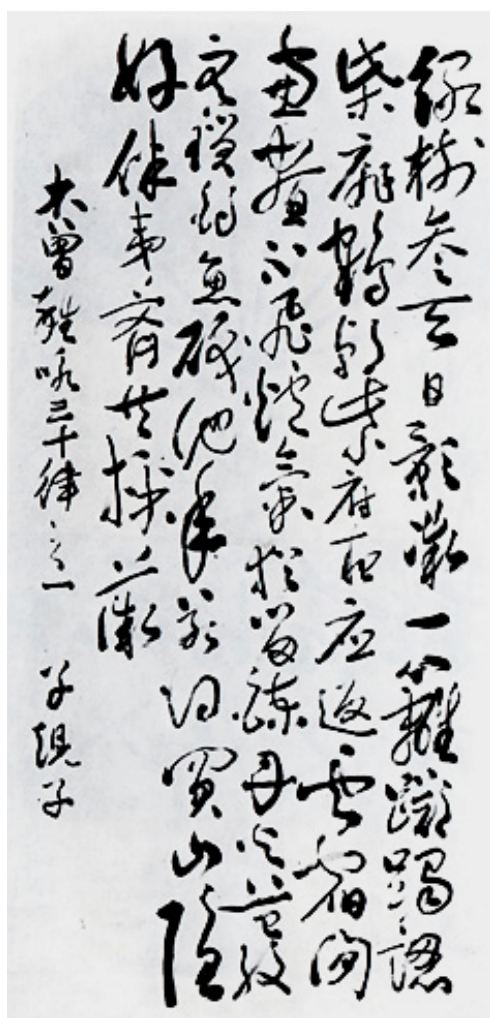
子規書・短冊
明治29年

子規は、書の表現について、常に工夫し、努力した。流麗なだけで、重味と深味のない、軽くて弱い、仮名の書を、強く大きな表現にするために苦心した。右の二つの短冊では、今までの仮名表現とは違って、仮名を大きく、堂々と、力強く書いている。

「短冊の認め方に就き要する心得を問ふ。答 心得とて別にあるべくもあらず、只見よきやうに書けば可なり。・・・注意すべきは、字の位置と、墨の濃淡となり。併し位置は一定したる者にあらねば、一行にも二行にも三行にも、其外何やうにも書くべし。墨の濃淡とても、俳句ではどこで墨つぎするなどいふ事歌の如く定まり居らず。善き加減にはからひて墨をつぐべし」(『ほととぎす』明治31年1月、『随問随答十』)

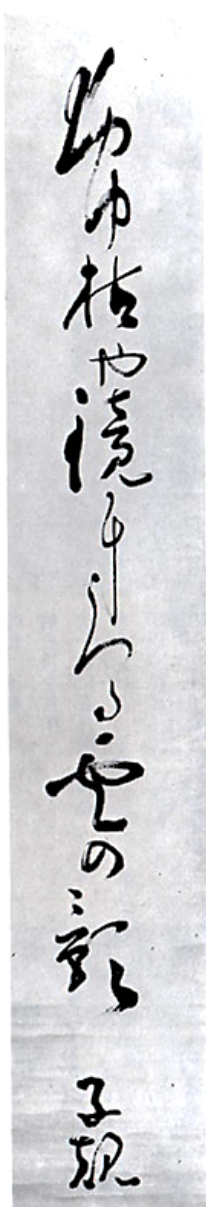
「子規自らの発明であらうと思ふが、或時平仮名の書き方に就いて、結構を大きく、ゆったり、余裕のあるやうに書けと教へた。例へば『い』にしても左右の二画一画の間ゆったり構へる。『ろ』にしても最終画の彎曲を十分に大きくするといった風に、総ての曲り、結びを大まかにすることによって、書の貧弱味を救ひ得るといふのであった・・・この教訓は単り仮名書きのみならず、総ての書体の上に應用、さるべき、永久の金科玉条である」

(碧梧桐『子規言行録』より)



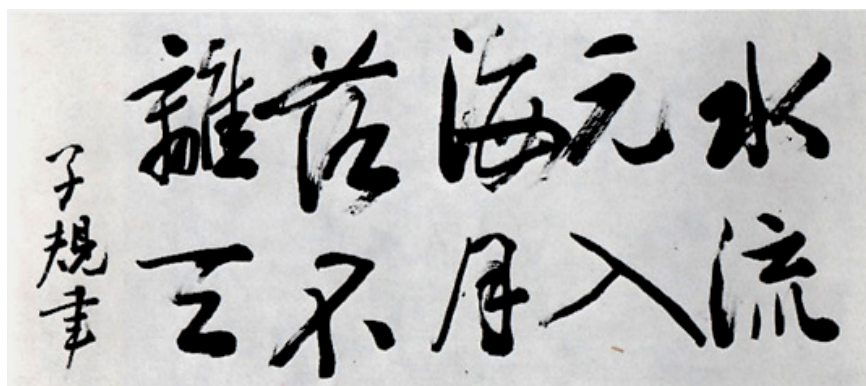
子規書「木蘇雜詠」条幅 69×95 cm 明治28年

緑樹参天日影微
一籬躑躅認柴扉
鶴朝柴府夜応返
雲宿間窓屋不飛
炉氣猶留煉丹火
苔紋空鎖釣魚磯
他年若得買山隱
好伴夷齋共採薇
木曾雜詠三十律之一
子規子



ふゆ枯や鏡にうつる雲の影 子規

子規書・条幅 116×20 cm
明治28年



子規書「水流元入海」78.5×34.5 cm 明治28年

「水流元入海 月落不離天 子規書」

明治26、27年頃、子規の書は、それまでの趙子昂風から一変したようである。陸羯南や愚庵らの影響かとも想われる。漱石の影響も考えられる。

漱石との愚陀仏庵での、つかの間の生活は、子規に活力をもたらした。病も癒えて、気分も爽快、希望にみちていた時だったようである。漱石の影響を受けて、この時に書いたものは、すべて、生き生きとした気分が入っている。「**美の標準は各個の感情にあり**」と子規はいっている。

この短期間の作品群は、明るく伸び伸びとして、品格がある。

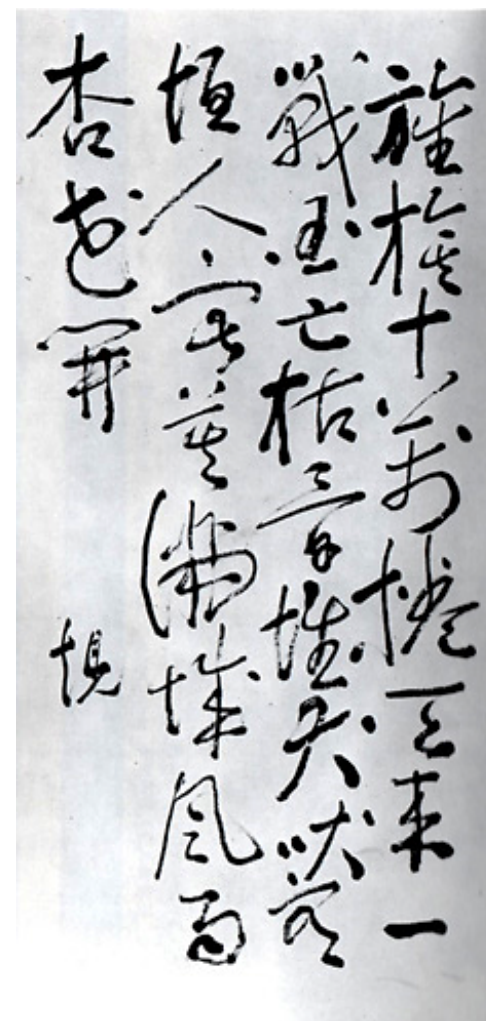
「この愚陀仏庵時代のもものは、子規の一つの山とも見られよう」「子規の愚陀仏庵での漱石との同居の時代は書の質の上からと同時に量の上から言っても特筆すべき時期であったといえる」（山上次郎）

しかし、子規と漱石とは根本的に違っていた。子規は常に真剣であり、いのちがけであった。「漱石には文人的な遊びがあるが・・・子規には遊びは許されなかった・・・一筆一筆が辞世とも言えた。」（山上次郎）



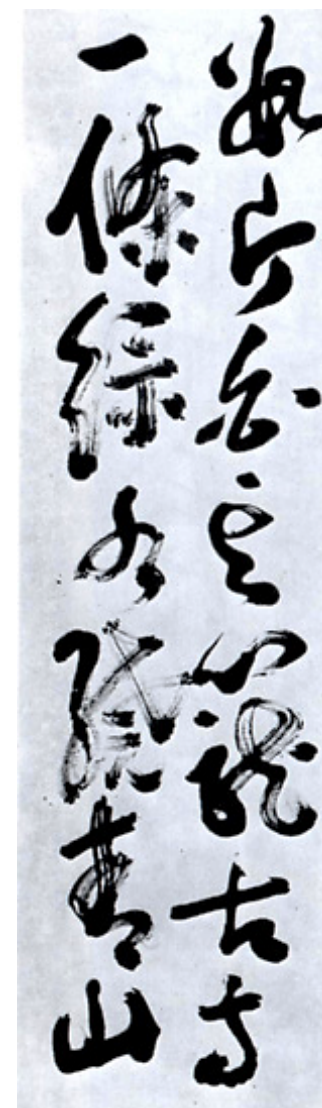
子規書「聯」178×11 cm
明治28年10月7日

「南窓倦書起門外青山 明治廿八年」
「靱ほすやにはとり遊ぶ門ノ内 子規」



子規書「条幅」78.3×38.2 cm 明治28年

「旌旗十万捲天来 一戦国亡枯骨堆
犬吠空垣人寂寞 滿城風雨杏花開 規」



子規書「条幅」143×40.5 cm
明治28年（1895年）

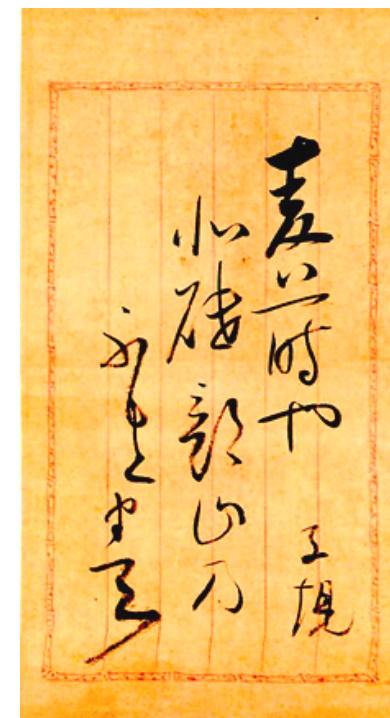
数片白雲籠古寺
一条緑水繞青山

書道もろもろ塾（'15, 7, 19）



子規書「蕪肥えたり」
短冊 明治31年？
かきもりぶんこ
柿衛文庫蔵

「天王寺蕪一 桶御送被下 難有奉存候 蕪肥えたり蕪村 うまれし村の土 子規」

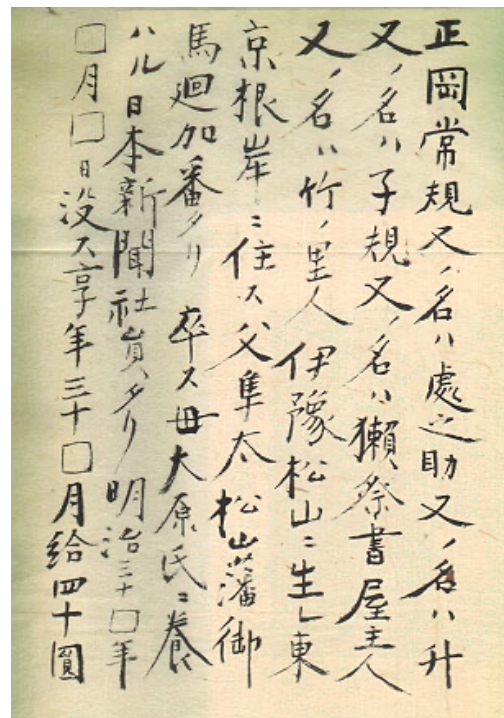


子規書「麦蒔や」 23.0×12.5 cm

明治28年？ かきもり
柿衛文庫蔵

「麦蒔や 北砥部山のふもとまで 子規」

子規は、「俳人の手蹟の巧拙は俳句の巧拙と略々同じ」（明治31年『俳人の手蹟』）といい、同書で其角と芭蕉の書について述べている。
「其角の書は縦横跌宕、霸氣筆に溢る。・・・一代の達筆なり。」
子規の短冊の書は、明治31、2年ころからふたたび変わってゆく。これには芭蕉の影響が大きいといわれる。



子規書「墓誌銘」明治31年7月13日、河東可全にあてて送付されたもの。30余年後に刻された。

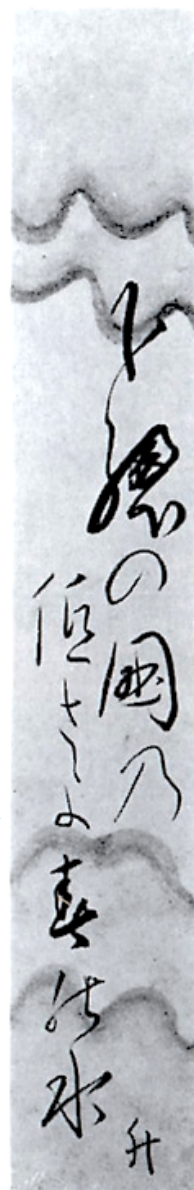
「墓誌銘」

正岡常規又ノ名ハ処之助又ノ名ハ升
又ノ名ハ子規又ノ名ハ瀬祭書屋主人
又ノ名ハ竹ノ里人伊豫松山ニ生レ東
京根岸ニ住ス父隼太松山藩御
馬廻加番タリ卒ス母大原氏ニ養
ハル日本新聞社員タリ明治三十〇年
〇月〇日没ス享年三十〇月給四十圓

河東可全^{かぜん}に送った墓誌銘に同封されていた手紙

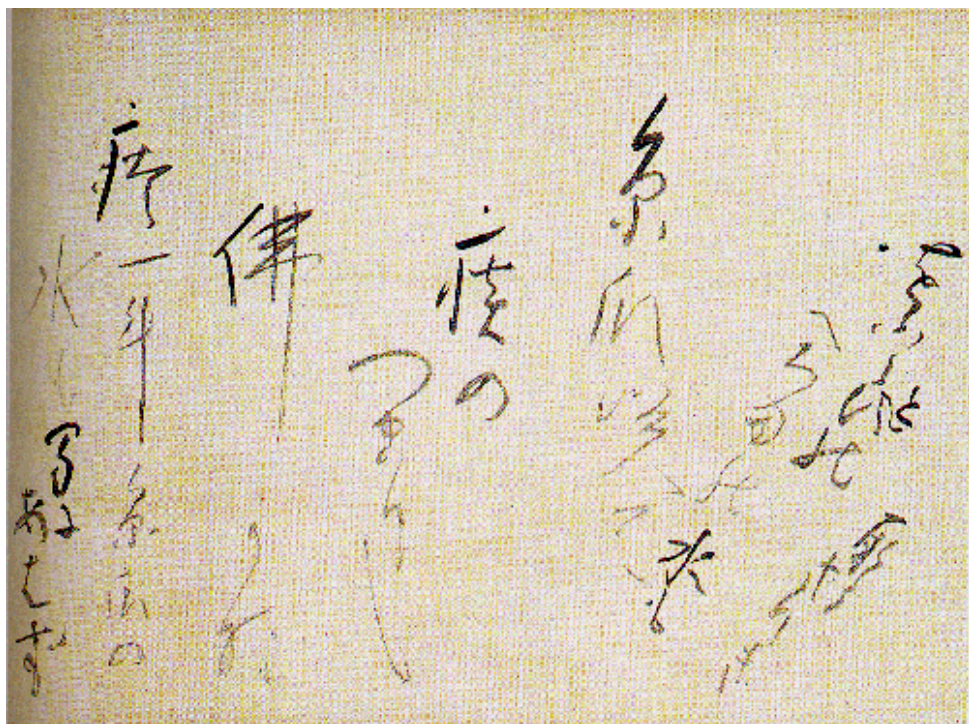
「アシヤ自分ガ死ンデモ石碑ナドハイラン主義デ、石碑立テテモ字ナンカ彫ラン主義デ、字ハ彫ツテモ長タラシイコトナド書クノハ大嫌ヒデ、ムシロコンナ石コロロコロガシテ置キタイノヂヤケレドモ、万一已ムヲ得ンコトニテ彫ルナラ別紙ノ如キ者デ尽シトルト思フテ書イテ見タ、コレヨリ上一字増シテモ余計ヂヤ」

この遺言により子規の墓には戒名などなく、「子規居士之墓」と「墓誌銘」が刻まれているだけである。
墓は東京都北区田端の大龍寺にある。河東可全は河東碧梧桐の兄である。可全は俳号。本名は銓^{せん}。



子規書・短冊
明治35年

「下総の国の低さよ春の水 升」



子規書「絶筆三句」1902年（明治35）9月18日午前10時頃揮毫 30.3×44.2 cm 国立国会図書館蔵

「……予はいつも病人の使ひなれた軸も穂も細長い筆に十分墨を含ませて右手へ渡すと、……いきなり中央へ 糸瓜咲て とすらすらと書きつけた。……こんど糸瓜咲てより少し下げて 痰のつまりし まで又た一息に書けた。……次は何と出るかと、暗に好奇心に駆られて板面を注視して居ると、同じ位の高さに 佛かな と書かれたので、予は覺えず胸を刺されるやうに感じた。」（河東碧梧桐「君が絶筆」より）

子規は翌19日の午前1時に永眠した。子規の命日を、これらの句にちなんで「糸瓜忌」という。また別号から「獺祭忌」ともいう。

糸瓜咲て痰のつまりし佛かな
 痰一斗糸瓜の水も間にあはず
 をととのへちまの水も取らざりき

「絶筆三句」
 子規は死の前日の9月18日の午前10時頃、画板に紙を貼つたものに、仰向けで辞世の句を書いた。紙の真ん中に一句目を書き、左に二句目、右に三句目を書いたという。



子規の手形 半紙大 明治33年8月24日

帰京後の子規は、脊椎カリエスと診断され、死が迫って来るのを感じたが、病に屈せず、俳句に歌に写生文に随筆に業績を残してゆく。

子規は、芭蕉の書を絶賛した。

「俳諧三百年の間最書を善くする者は松尾芭蕉なり……徳川三百年間に於て仮名交りの書を善くする者、1人の芭蕉の右に出づる者無し。……芭蕉の書は……和様の卑俗にも陥らず、貫之流の平穩にも倣はず、漢字仮字は一種の調和を成してしかも雅致あり気力あるを得たり。」（『俳人の手蹟』）

子規は、青年会津八一から教えられた、良寛の書も絶倫だとほめている。

子規は明治30年ころから書を深く研究したようである。そして、明治31年に芭蕉を、明治33年には良寛を発見した。当時の書壇の書家などすでに眼中になかったのである。



子規画「菓物帖」より 西洋リンゴ 日本リンゴ四 水彩
明治35年6月～8月 9.2×12.0 cm 国立国会図書館蔵



子規画「玩具帖」魚釣り玩具
19.8×17.0 cm 水彩
明治35年8月～9月

「玩具帖」は、子規最晩年の4枚の絵からなる帖。子規没後に正岡忠三郎が帖に仕立てて命名したもの。題簽は高浜年尾の書。この絵には、九月二日(二百十日曇)と書かれている。死の17日前の作。



子規画「草花帖」ハナバシヨウ
明治35年8月 14.3×17.5 cm
国立国会図書館蔵

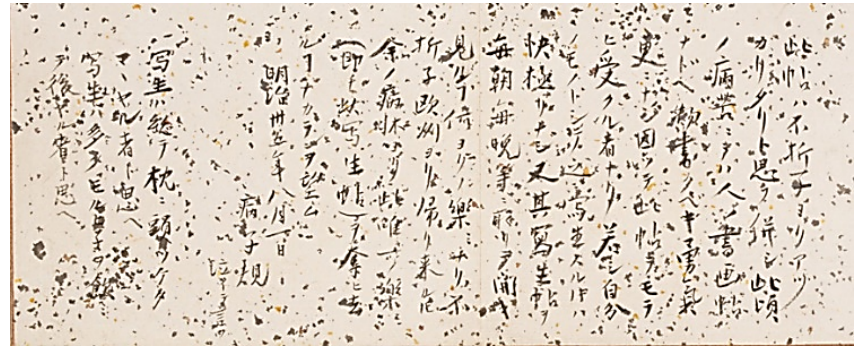


子規画「鶏頭画賛」明治34年ころ 縦17.6×17.6 cm 水彩
画賛「鶏頭はまだ下草よ女郎花」
女郎花は描かれていない。

「あづま菊」
熊本に在る漱石に送った絵。
右脇に「是は萎みかけた所と思ひたまへ畫が下手いのは病人だからと思ひたまへ。嘘だと思はば肱ついて描いて見玉え」と注釈がある。
右上に「寄 漱石」として左半分に歌一首を添えている
「東菊活けて置きけり火の国に住みける君の帰り来るがね」
「・・・子規はこの簡単な草花を描くために、非常な努力を惜しまなかったように見える。わずか三茎の花に、少くとも五六時間の時間をかけて、どこからどこまで丹念に塗り上げている。これほどの骨折は、ただに病中の根気仕事としてよほどの決心を要するのみならず、いかにも無雑作に俳句や歌を作り上げる彼の性情から云つても、明かな矛盾である。・・・東菊によつて代表された子規の画は、拙くてかつ真面目である。・・・隠し切れない拙が溢れていると思う・・・子規は人間として、また文学者として、最も「拙」の欠乏した男であつた。・・・彼のわざわざ余のために描いた一輪の東菊の中に、確にこの一拙字を認める事のできたのは、・・・余にとっては多大の興味がある・・・」
(明治44年、夏目漱石『子規の画』より)



子規画「あづま菊」1900年(明治33)
37.8×26.0 cm 水彩



子規書「草花帖・見返 (序文)」 この画帖は中村不折から贈られたもの。
「草花帖」は、明治35年8月1日～20日までに草花17図を描いたもの。

「草花帖」見返し (序文)

此帖ハ不折子ヨリアツ
カリタリト思フ併シ此頃
ノ病苦ニテハ人ノ書画帖
ナドハ物書クベキ勇氣
更ニナシ因ツテ此帖ヲモラ
ヒ受クル者ナリ若シ自分
ノモノトシテ之ニ写生スル時ハ
快極リナシ又其寫生帖ヲ
毎朝毎晩手ニ取りテ開キ
見ル事何ヨリノ樂ミナリ不
折子歐洲ヨリ歸リ来ルトモ
余ノ病牀ヨリ此唯一ノ樂
(即チ此写生帖)ヲ奪ヒ去
ル事ナカラシム望ム

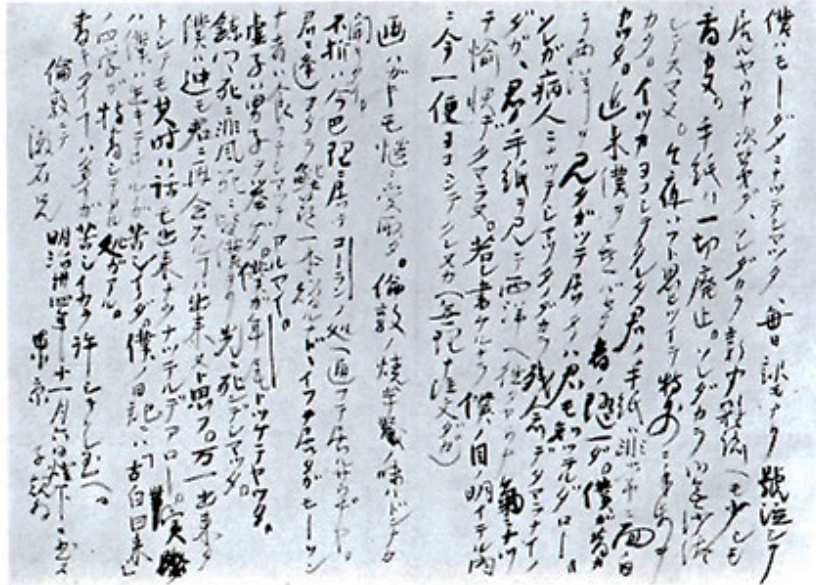
明治卅五年八月一日

病子規

泣イテ言フ

写生ハ総テ枕ニ頭ヲツケタ
マヽヤル者ト思ヘ
写生ハ多クモルヒ子ヲ飲ミ
テ後ヤル者ト思ヘ

子規の手紙 (千百通以上の手紙が残っている)



子規は、幼いころから絵が好きで、画家になることが夢であったが、母に反対され、専門の画家になることをあきらめた。それでも「自ら楽しまんとならば画の拙なるを憂へず」といい、生涯、絵を楽しんだ。

子規11歳の時の、北斎作『画道独稽古』の模写が残っているが、すでに、何年も独習した跡が見える。

がどうのとげこ

『画道独稽古』

『病牀六尺』

死の直前に描かれた「菓物帖」「草花帖」

「玩具帖」は、文学における彼の持論である「写美」の真髄を絵で表したものである。

「草花の一枝を枕元に置いて、それを正直に写生して居ると、造化の秘密が段々分かつて来るやうな気がする。」(子規『病牀六尺』より)



母八重と妹律 大正6年(1917)7月



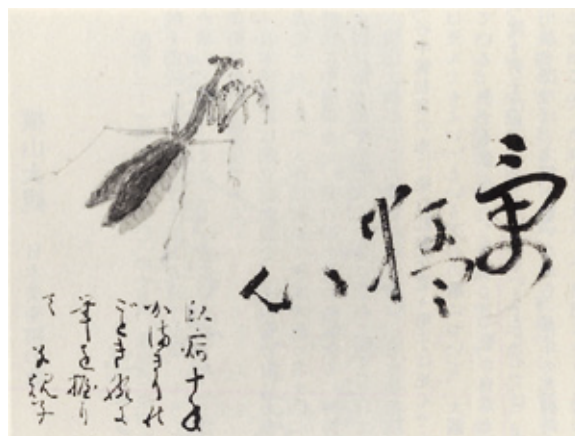
母八重(昭和2年没)



妹律(昭和16年没)

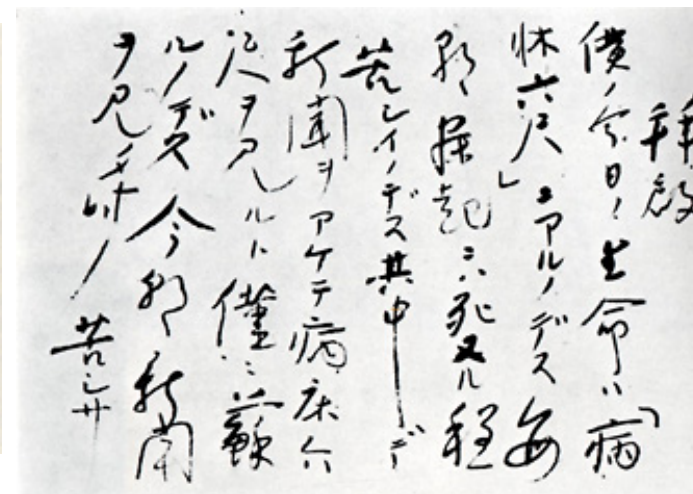


母八重と18歳の子規



子規書・画「かまきりの図・勇猛心」明治35年7月13日
水彩、墨 18.3×25.5 cm

臥病十年かまきりのごとき腕に筆を握りて 子規子

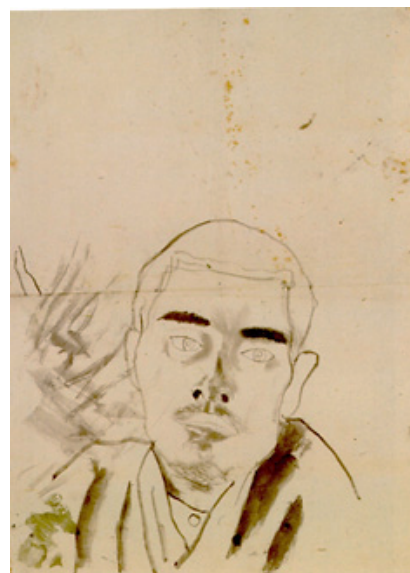


子規書「古島一雄宛書簡」部分 明治35年

日本新聞社の主宰の
古島一雄宛の手紙。月日
不詳。
「拝啓
僕ノ今日ノ生命ハ病牀
六尺ニアルノデス毎朝
寐起ニハ死ヌル程苦シ
イノデス其中デ新聞ヲ
アケテ病牀六尺ヲ見ル
ト僅ニ蘇ルノデス今朝
新聞ヲ見タ時ノ苦シサ
病牀六尺ガ無イノデス
泣キ出シマシタドーモ
タマリマセン
若シ出来ルナラ少シデ
モ(半分デモ)載セテ戴
イタラ命ガ助カリマス
僕ハコンナ我儘ヲイハ
ネバナラヌ程弱ツテキ
ルノデス」



病床の子規 明治33年4月5日



子規自画像下絵 明治33年 38.4×26 cm

母と妹

子規の晩年、50代の母八重と、二度結婚して二度とも不縁になった30代の妹律が子規の看病にあたった。

母八重は夫の死後、裁縫を教え家計を補い二人の子を育てた。上京し、家事をし、子規の看病をし、子規の最期を看取った。子規を回想して「小さい時分にはよっぽどへぼでへぼで弱味憎でございました」「乳児のころの子規は顔が異常に丸く、見苦しく、鼻も低かった。体質虚弱で背も低く、内向的だったのでよくいじめられた」という。

妹の律は、明治23年二度目の離婚をして、松山から上京後、献身的に兄の看護をした。子規没後は家督を継ぎ、職業学校に通い裁縫の資格を取り、同校の教員となった。母の看病のため教師をやめてからも、子規庵で裁縫教室を開き生計を立てながら、膨大な子規の遺品遺墨と庵の管理保存に努め、昭和3年財団法人子規庵保存会初代理事長に就任した。子規の自筆原稿や真蹟類は律の手によって毎年きちんと虫干しされ、子規庵から一枚たりとも散逸しなかった。大正3年、従兄弟の忠三郎を養子に迎え正岡家を継承させた。子規は『仰臥漫録』の中で、律を「癩癪持」「強情者」「理屈づめの女」などと罵倒している。



根岸子規庵の庭



根岸子規庵 6畳と8畳の間



根岸子規庵の玄関



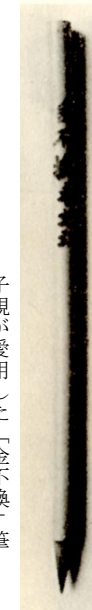
真中が子規の墓、右は母の墓、左は律の墓



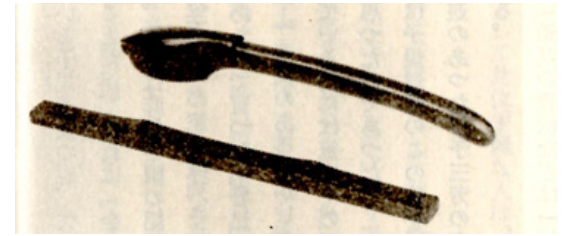
子規愛用の机のレプリカ



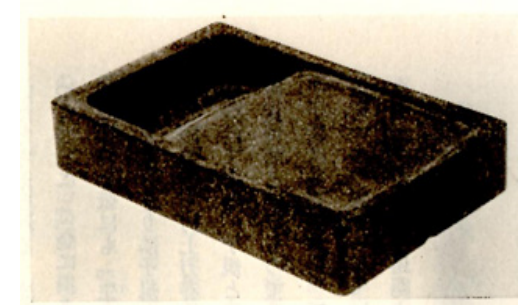
根岸子規庵 6畳の間と机と糸瓜棚



子規が愛用した「金不換」筆



子規遺愛の矢立と文鎮 根岸子規庵蔵



子規遺愛の硯 根岸子規庵蔵

はじめ、子規は、「南画に非ずんば絵に非ず」という絵画観を持ち、反俗で超越的で風流の精神を重んじ、気韻生動論を信奉していたが、洋画家の中村不折と下村為山に出会い西洋の「写真」「自然主義」に目覚め、「洋画に非ずんば絵に非ず」と大変化する。そのリアリズム芸術観が子規の文学活動に影響し、俳句・短歌の革新へと進展した。

ヨーロッパ一九世紀自然主義の影響を受けた子規は、現実密着型の生活詠を重視し、言葉遊びや修辞技巧を否定し、古今・新古今集を全否定、万葉集を高く評価した。万葉の詩人以外では源実朝、橘曙覧らを称賛した。

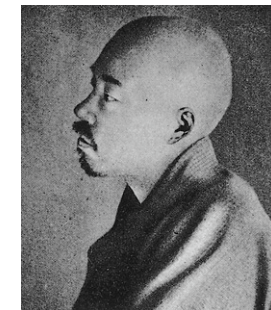
子規の俳句革新運動は、新聞「日本」に発表した『頼祭書屋俳話』にはじまる。彼は俳句の墮落を嘆き、月並を排撃し陳腐と俗気を嫌悪し、芭蕉の詩情を評価、蕪村らを発掘し、蕪村の俳句を理想とした。

歌は感激を率直に歌い、自然を写生するもの、そして、使う言葉は「古語」である必要はなく、現代語、漢語、外来語を用いても良い、と主張した。

彼は現在の日常生活を表現する、短くて無駄のない簡潔な詩歌を見つけるために努力し、近現代文学における短詩型文学の方向を決定し、詩歌に革命をもたらした。子規の理論が近代短歌の理論となったのである。

根岸短歌会を主宰、短歌の革新につとめた。根岸短歌会は伊藤左千夫、長塚節、岡麓らにより短歌結社「アララギ」へと発展する。

彼は、歌や俳句だけでなく新体詩や小説、漢詩、能、隨筆にも挑戦し、和洋漢、世界のあらゆるものから学んだ。



子規



子規遺稿集を虫干しする寒川鼠骨と律